

現代女子 論

第6講 農業



①農園を見回る大西千晶さん—京都府南丹市園部町で、金澤稔撮影
②収穫作業をする間晴苗さん。赤い手袋や花柄のパンツがおしゃれ—大阪府能勢町で、田中博子撮影



それなら、自分でつくる

日光を浴びながら土に触れていると、日焼けは気になるけれどなぜか落着く。農業入りが女性の間にじわりと広がっている(1)。「都会の生活に疲れ、自然に癒やされたい」という私的な理由だけではない。環境汚染や食物アレルギーの子どもの増加など、命より経済優先の社会に違和感を覚え、農業に飛び込んだ女性たちを訪ねた。【田中博子】

京都府中部、南丹市に広がる約1万平方メートルの畑で、なすやオクラが収穫の時を待っていた。「野菜も雑草も虫も、自然にあるものは一つ一つが命なんです。自然と向き合う時間が楽しくて」。大阪市淀川区の大西千晶さん(33)は若者に有機農業への関心を持ってもらうため、公務員の両親の反対を押し切って20歳で起業、株式会社「プリローダー」を設立した。ITによる畑の管理やコストに見合う堆肥の開発などで、無農薬農業の大型化を目指す。自然に沿った農

業でも食べていけると分れば、若者が職業として農業にもっと興味を持つてくれると考えるからだ。神戸大を休学し、スーツ姿で野菜の卸先開拓などに奔走する日々。週末だけシャワーで畑に向かう。普段は農業に関心が高い学生9人が、交代で管理している。

数年間、世間に衝撃を与えた「ギヤル農業」(2)。だがブームとは別に農業の将来を考え、生産から加工、販売を一手に担う女性が多い(3)。大阪府能勢町の「晴苗農園」(4)。両親が教師という間晴苗さん(31)は文系の大学を卒業後、農業の知識がなかったため、1年の研修を受けて独立した。小ぶりの畑にトマトやピーマン、シカクマメなど種類豊富に育て、毎週もぎたてを50人の会員に

が、半数は女性という。食料自給率の低下や高齢化など農業の未来を考えると不安で、「何かしなきゃ」って。女性は本能的に食に敏感なのかも」小規模で自分に合った仕組みを作ることだという。若い人に「やってみたい。自分にもできそう」と思ってもらえる農業を目指す。性格も変わったのだとか。「上手に育てても台風でダメになることもある。失敗しても、クヨクヨしなくなった。おしゃべりな作業着(5)姿で語る。言葉の端々に強い意志がのぞく。

軽トラックで配達している。「直接届けたり畑に来てもらったりして、農業を身近に感じてほしいと思う。環境問題に関心があり、有機農業なら自然を守り、文化を受け継ぐことができる」と任事に選んだ。都会に憧れた時期もあるが、今は消費に興味がない。本当に大切なものに囲まれて暮らしたい。「自分が食べたいものを作っている、スーパーにもあまり行かなくなりました」と笑う。

「若い農家が増えれば、農業はもっとおもしろくなる」と、今年からソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を使ったネットワーク作りを乗り出した。男性農家から「女のくせに」「結婚したらやめるんやろ」といふ言われながらも「結婚しても一生続ける」と宣言。男性を見る目が変わった。「田起こし一つにも人柄が出る。農機具を大事に、作業を丁寧にする人は女性に優れますよ」と教えてくれた。



「農業女子」は家族や子どもの将来のため、「本当に安心して食べられる物は、自分で作るしかない」と覚悟を決めていた。大きなこととは言わず、自然と調和した農業を地道に目指している。命を大切にしながら、同時に昔ながらの文化を守る彼女たちが、まぶしく見えた。

補講

ギャル農業の火付け役 藤田志穂さん

「しんどい、もうからない」ひっくり返す

【聞き手・田中博子】
ふじたしほ 1985年生まれ。19歳で起業し、2009年から農業に取り組み、著書に「ギャル農業」(中央公論新社)など。

ある農家さんに「農業をする」と愛情深く聞くことができた。生き物を育てるのは、子どもを産み育てる女性に感動的に合うように思います。女性ならではのアイデアや丁寧さもある。失敗もするけど、やった分だけストリートに返ってくる、やりがいのある仕事だと感じました。今は農業高校生が地域の食材を使ったアイデアメニューを競う全国大会を開催しています。未来の農業を引っ張る高校生を応援して、農業のおもしろさをもっと伝えていきたいです。



—田中博子撮影

農業に興味を持ったのは、食料自給率の低下や耕作放棄地が増えている原因の一つが農家の高齢化と知ったから。知識や経験がなくとも、体力なら若者がフォローできると思いました。最初は遊び半分でやめて、「そんなに甘くない」と厳しいことも言われました。でも農業は「しんどい、もうからない」とネガティブなイメージが強いので、楽しさを伝えるのが私の役割だと思っています。